硫黄島の火山活動解説資料（令和８年 10 月）

気 象 庁 地 震 火 山 部
火山監視・警報センター

翁浜沖で 27 日以降、噴火が確認されています。
長期的には島全体の隆起を示す地殻変動が認められ、多くの噴気地帯や噴気孔があり、各所で小規模な噴火が時々発生していることから、従来から小規模な噴火がみられていた領域や沿岸では、小規模な噴火の発生に警戒してください。
平成 19 年 12 月１日に火口周辺警報（火口周辺危険）を発表しました。また、平成 24 年４月 27 日以降の火山活動に伴い、平成 24 年４月 29 日に火山現象に関する海上警報を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○ 活動概況

・噴気など表面現象の状況（図１～２）

海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、27 日 06 時頃から翁浜沖のこれまで噴火がみられた地点で、噴火が確認されています。11 月６日（期間外）以降、高さ 200～300m程度の有色噴煙が確認されており、噴出物により陸地が形成されていると考えられます。その他の領域では、今期間、噴火は確認されませんでした。

阿蘇台東（あそだいひがし）監視カメラによる観測では、井戸ヶ浜で白色噴気が時折観測されました。阿蘇台陥没孔及び千鳥ヶ浜火口からの噴気は観測されませんでした。

21 日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、千鳥ヶ浜火口で乳白色及び黄褐色の火口湖が認められました。翁浜沖や摺鉢山の北西岸沖で気泡の湧出が認められました。また、島の全周に渡り茶褐色及び黄褐色～黄緑色の変色水が認められました。

・地震や微動の発生状況（図３、図４－１①～③、図４－２①、図５－①～④）

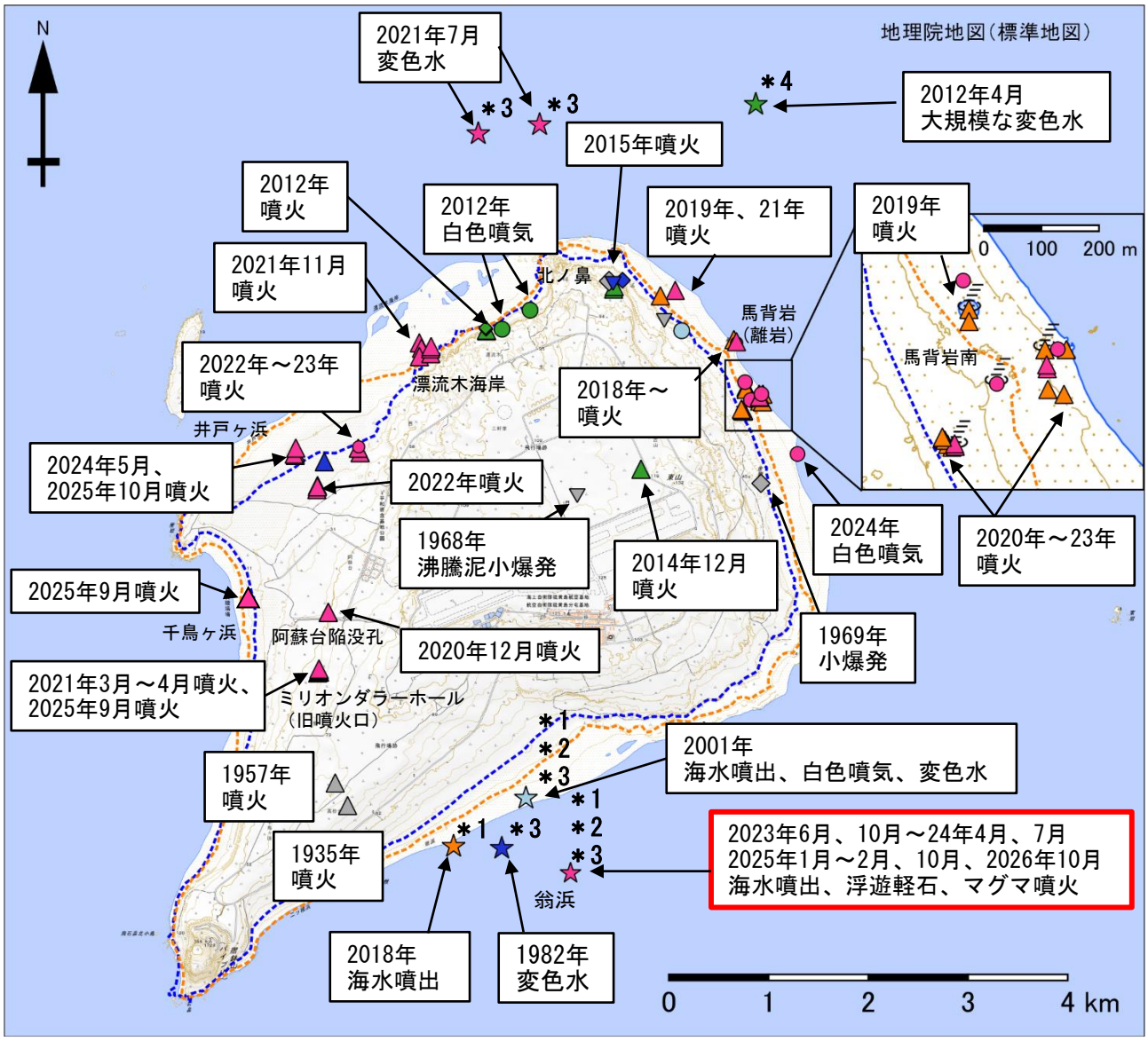
今期間、火山性地震はやや少ない状態で経過しました。

これまでの翁浜沖や千鳥ヶ浜火口の噴火活動でみられたような単色型微動は、少ない状態で経過していましたが、27 日以降急増し、30 日以降は連続的に継続しています。

・地殻変動の状況（図４－１④⑤、図４－２②③、図５－⑤、図６、図７）

GNSS 連続観測では、2025 年 11 月以降の隆起は８月下旬以降概ね停滞していましたが、10 月頃から再び隆起傾向となっています。長期的には、2024 年頃から隆起速度に低下が認められるものの、島全体の隆起が継続しています。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
次回の火山活動解説資料（令和８年 11 月分）は令和８年 12 月８日に発表する予定です。
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/kazanyougo/mokuji.html
この資料は気象庁のほか、国土地理院及び国立研究開発法人防災科学技術研究所のデータも利用して作成しています。
資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図 50mメッシュ（標高）』『数値地図 25000（行政界・海岸線）』『電子地形図（タイル）』を使用しています。



イベントの種別	
△	噴火（噴出物がごく少量のものを除く）
▽	噴火（規模不明）
◇	詳細不明イベント
○	ガス噴出イベント・熱水噴出イベント
☆*1	海底噴出イベント
☆*2	噴煙イベント
☆*3	濃い変色水が円形に広がるように海面上に湧出
☆*4	大規模な変色水の新たな出現

年代（色）	
△	～1970 年
▲	1971 年～1990 年
△	1991 年～2010 年
△	2011 年～2015 年
△	2016 年～2020 年
△	2021 年～

海岸線	
----	1978 年
----	2016 年

図１　硫黄島 過去に噴火等が確認された地点及びそれらにおいて認められた現象

噴出地点及び各噴出地点で確認された現象は、関・他(2024)*（2023 年８月まで）及び気象庁、海上自衛隊及び防災科学技術研究所（2023 年９月以降）の観測を基に記載しています。青及び橙破線はそれぞれ 1978 年及び 2016 年の海岸線を示します。

*関晋・長井雅史・及川輝樹 (2024) 2002 年から 2023 年８月における硫黄島の噴出地点. 地質調査総合センター研究資料集, no.755, 12p.+1 file（https://www.gsj.jp/publications/pub/openfile/openfile0755.html）.

・今期間、翁浜沖で噴火が観測されました（赤枠）。



図２－１　硫黄島　井戸ヶ浜及び千鳥ヶ浜の状況（阿蘇台東監視カメラによる）

・阿蘇台東監視カメラによる観測では、井戸ヶ浜で白色噴気が時折観測されました。阿蘇台陥没孔及び千鳥ヶ浜火口からの噴気は観測されませんでした。



図２－２　硫黄島　翁浜沖の噴火の状況（海上自衛隊硫黄島航空基地隊提供）
（上図：10 月 28 日、下図：11 月６日（期間外））

・海上自衛隊硫黄島航空基地隊によると、27 日 06 時頃から翁浜沖のこれまで噴火がみられた地点で、噴火が確認されています。
・11 月６日（期間外）以降、高さ 200～300m程度の有色噴煙が確認されており、噴出物により陸地が形成されていると考えられます。



図２－３　硫黄島　千鳥ヶ浜の状況（海上保安庁提供）

・21 日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、前回（９月 17 日）同様、千鳥ヶ浜火口で乳白色及び黄褐色の火口湖が認められました。



図２－４　硫黄島　翁浜沖、井戸ヶ浜及び摺鉢山周辺の状況（海上保安庁提供）

・21 日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、翁浜沖のこれまで噴火があった地点で気泡の湧出が認められました。
・井戸ヶ浜では噴気は認められませんでした。
・摺鉢山の北西岸沖で新たに間欠的な気泡の噴出が認められました。

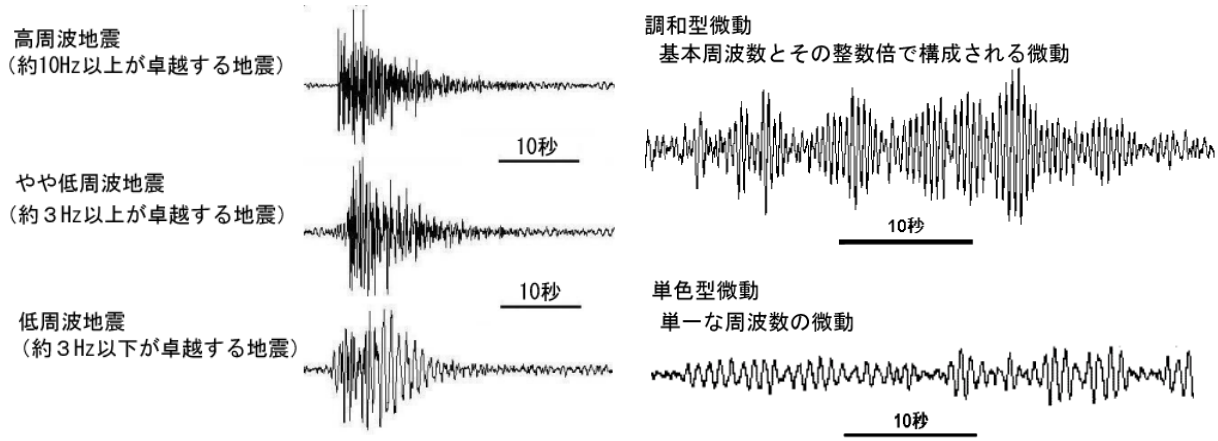


図３　硫黄島　硫黄島でみられる主な火山性地震、微動（調和型、単色型）の特徴と波形例

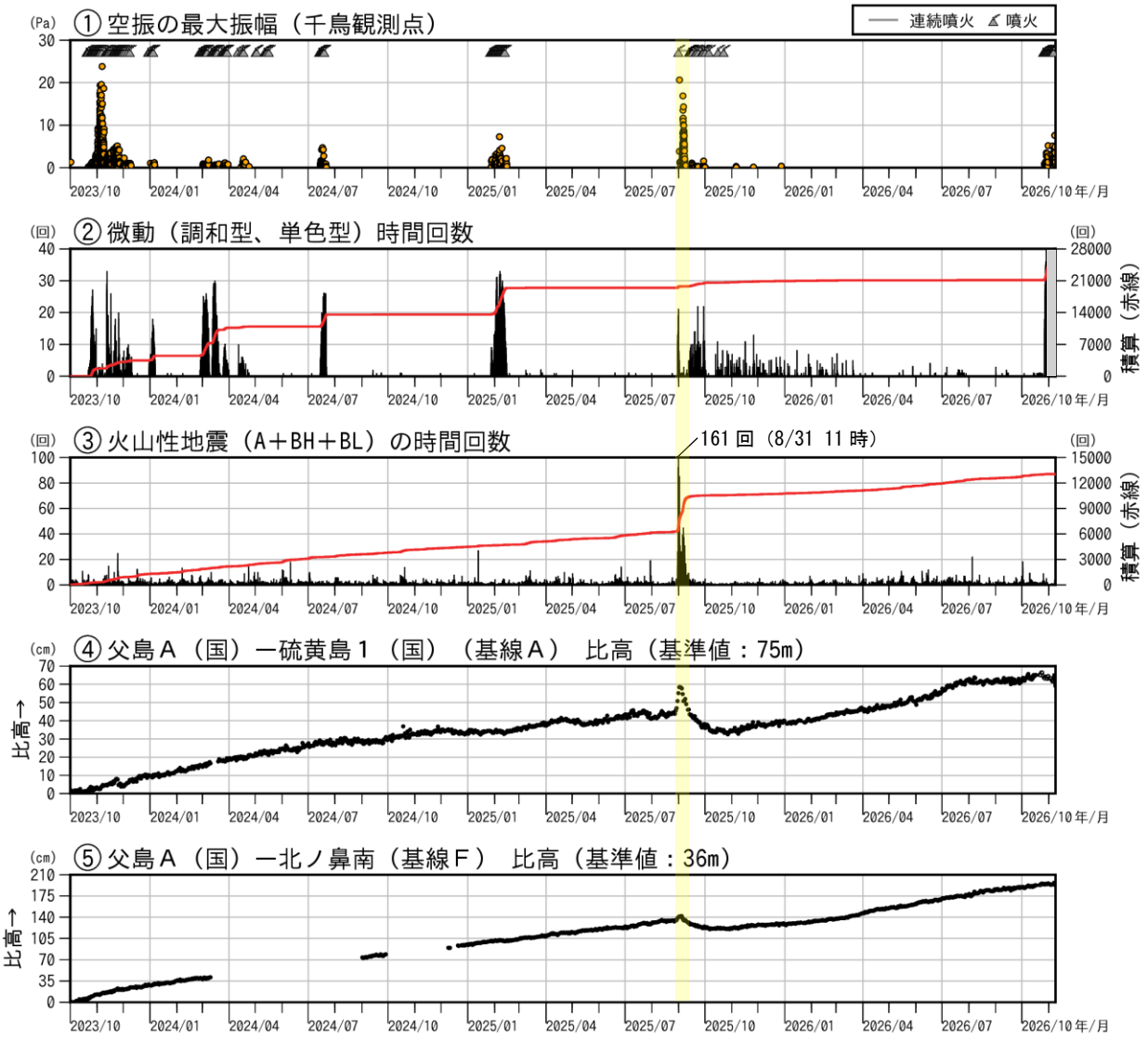


図４－１　硫黄島　火山活動経過図（2023 年 10 月１日～2026 年 11 月８日（期間外））

【計数基準】千鳥あるいは天山（防）で上下動振幅 30μm/s 以上、S-P 時間 2.0 秒以内
千鳥観測点での空振の振幅は、上記の地震の計数基準によらず、噴火に伴う明瞭な信号であると判断した場合にのみ検測しています。ただし、ノイズレベルが大きく、噴火に伴う空振の振幅が検測できなかった期間があります。

②　2026 年 10 月 30 日以降、連続微動のため回数は表示していません。

④⑤ 父島Ａに対する比高の変化（図７に対応）

（国）：国土地理院　グラフの空白部分は欠測

・今期間、翁浜沖で噴火が観測されました。
・これまでの翁浜沖や千鳥ヶ浜での噴火活動でみられたような単色型微動は、少ない状態で経過していましたが、27 日以降急増し、30 日以降は連続的に継続しています（②）。
・今期間、火山性地震はやや少ない状態で経過しました（③）。
・GNSS 連続観測では、2025 年 11 月以降の隆起は８月下旬以降概ね停滞していましたが、10 月頃から再び隆起傾向となっています（④⑤）。
・2025 年９月に千鳥ヶ浜で発生した噴火では、噴火に先行して８月 30 日から地震活動が活発化するとともに、通常より大きな隆起が観測されました（黄色部分）。

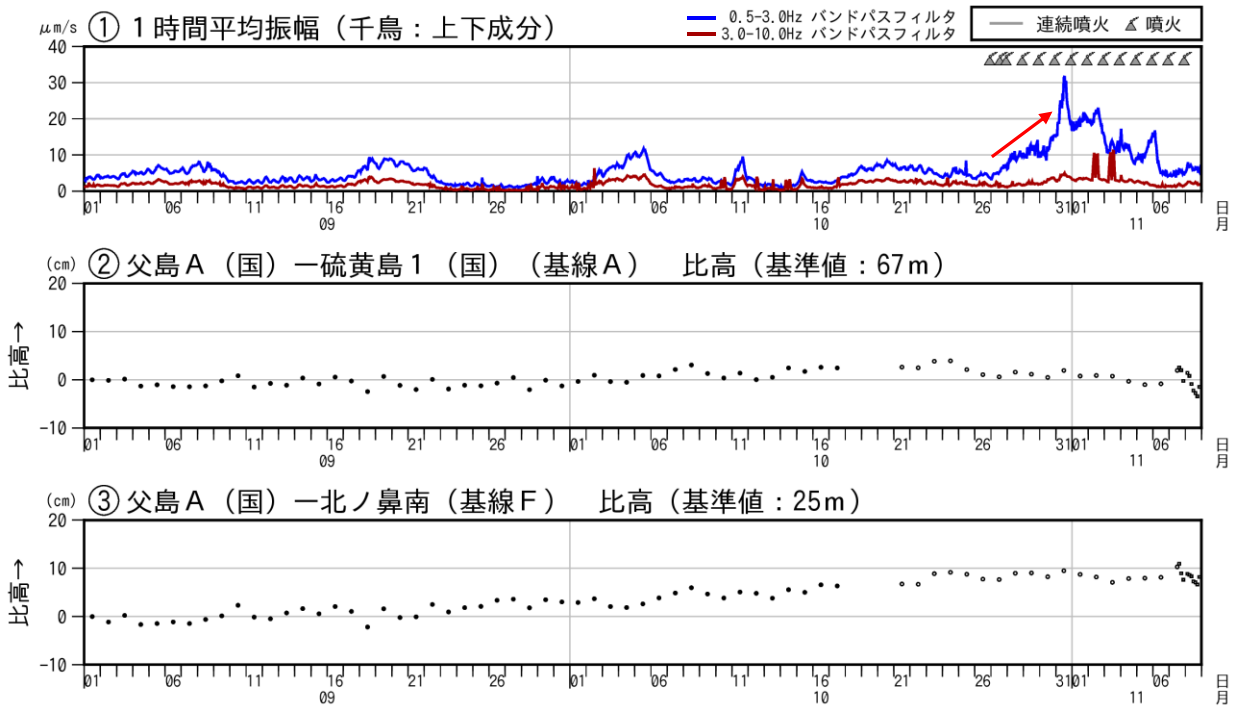


図４－２　硫黄島　火山活動経過図（2026 年９月１日～11 月８日（期間外））

①　千鳥観測点上下動成分の１時間平均振幅
台風等によりノイズレベルが上昇する際にも、0.5～3.0Hz の周波数帯（青線）及び 3.0～10.0Hz の周波数帯（赤線）の１時間平均振幅に高まりがみられます。

②③ 父島Ａに対する比高の変化（図７に対応）

（国）：国土地理院　グラフの空白部分は欠測

・27 日に翁浜沖で噴火が観測されて以降、単色型微動の卓越周波数を含む周波数帯の振幅レベルが増大しました（①青線）。
・GNSS 連続観測では、2025 年９月に千鳥ヶ浜で発生した噴火に先行して観測されたような、通常より大きな隆起は、今回の翁浜沖での噴火では観測されませんでした（②③）。

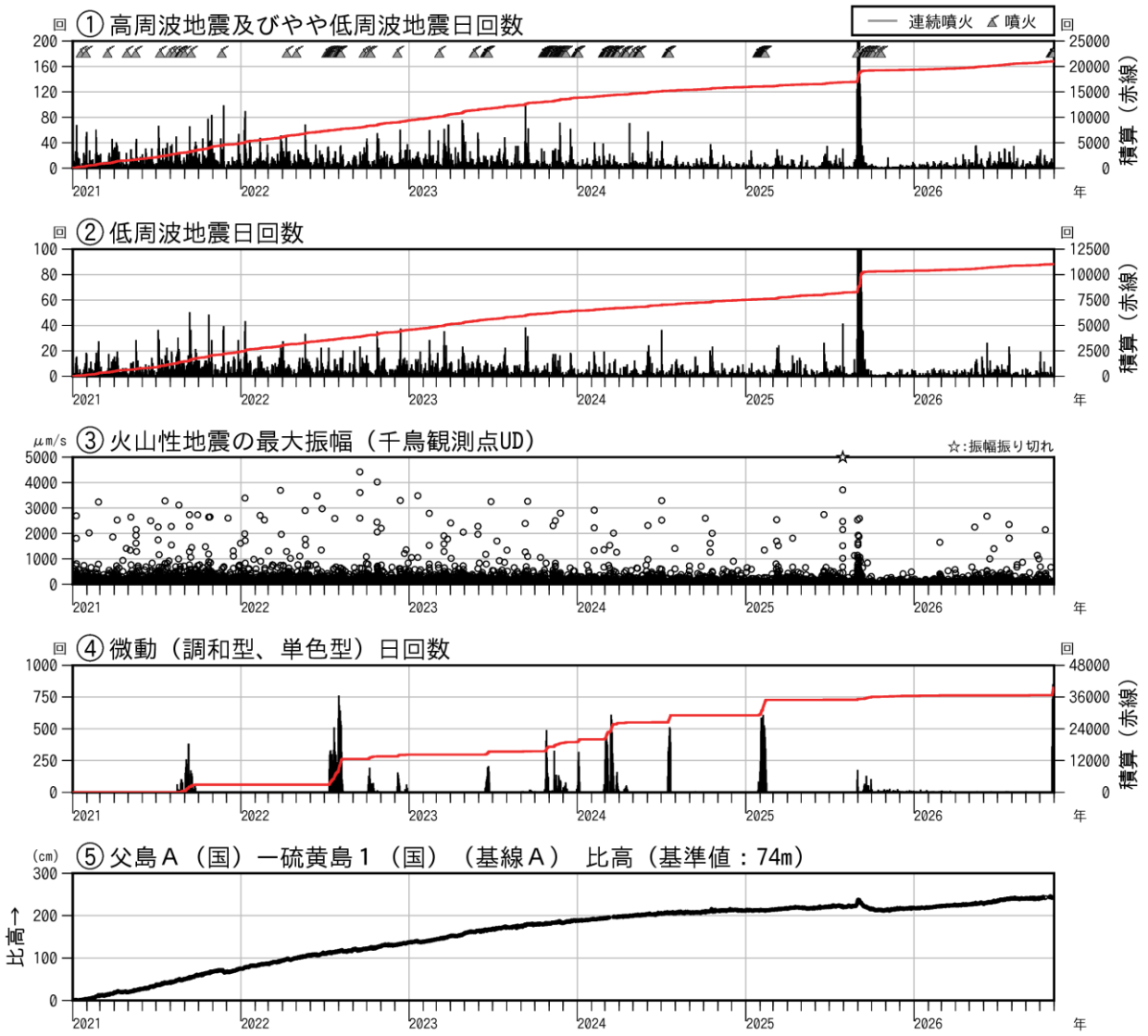


図５　硫黄島　火山活動経過図（2021 年１月１日～2026 年 10 月 31 日）

【計数基準】千鳥あるいは天山（防）で上下動振幅 30μm/s 以上、S-P 時間 2.0 秒以内

・中期的には 2024 年以降、それ以前と比較して火山性地震の発生頻度に低下傾向が認められていましたが、2025 年８月 30 日から９月上旬にかけて地震が増加しました。今期間はやや少ない状態で経過しました（①～③）。
・単色型微動は、2021 年以降の翁浜沖での噴火の際にも観測されています（④）。
・2024 年頃から隆起速度に低下が認められるものの、長期的には島全体の隆起が継続しています（⑤）。

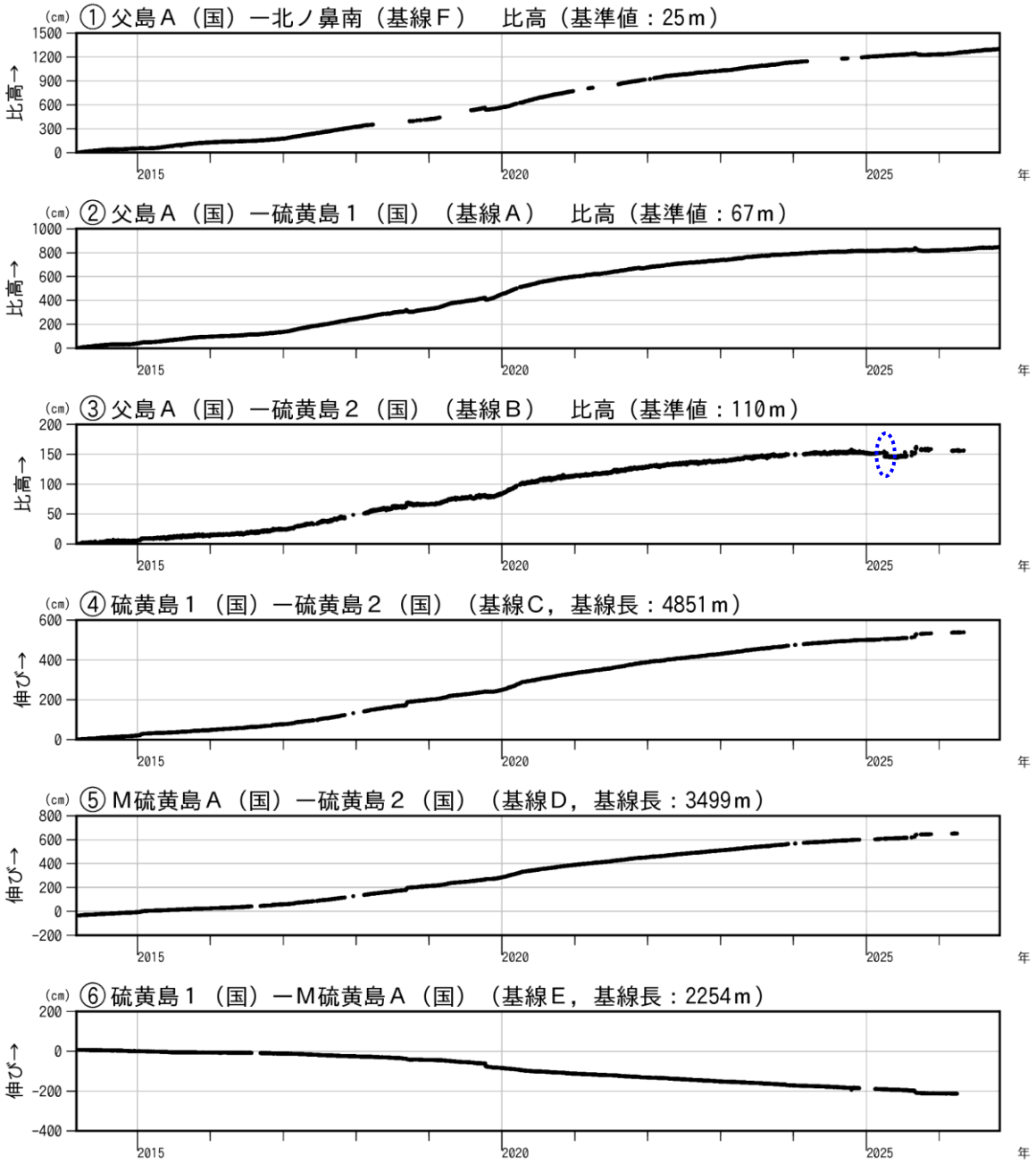
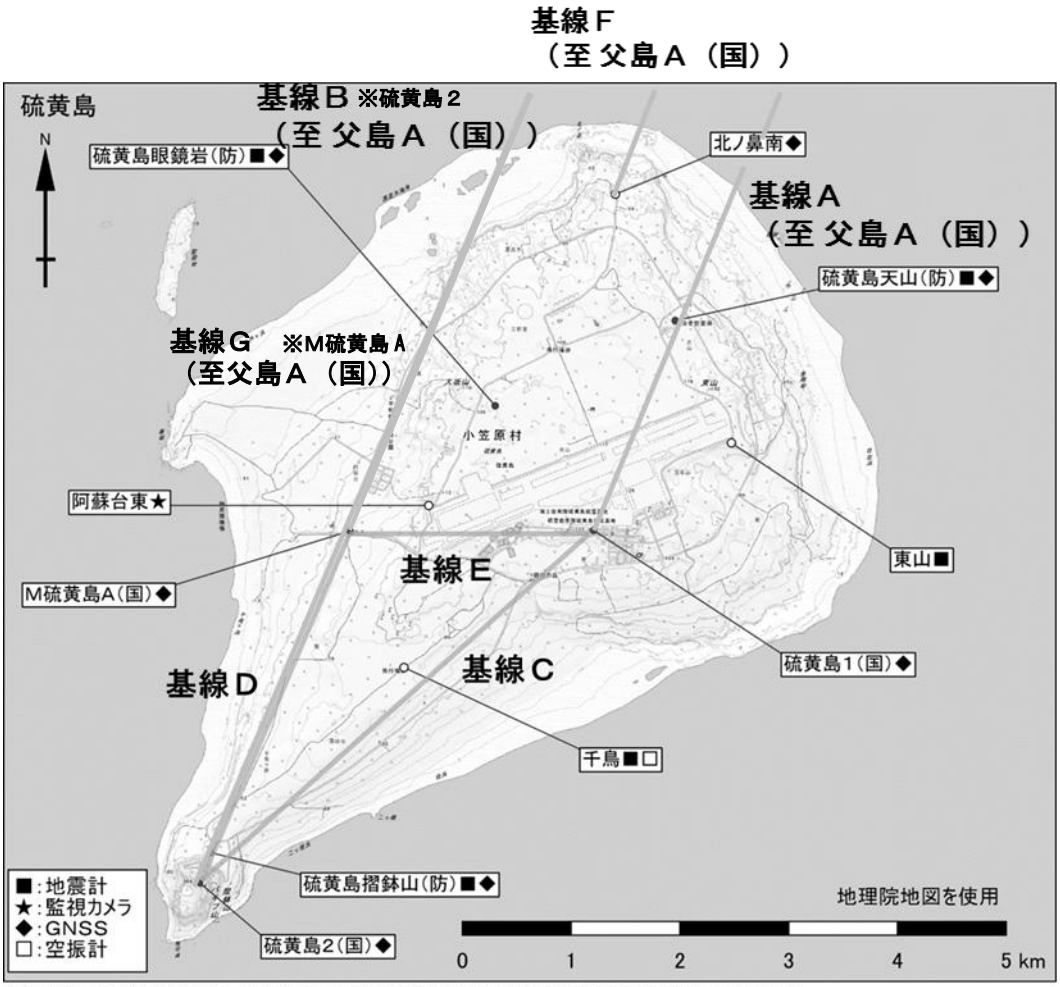


図６　硫黄島　GNSS 連続観測結果（2014 年３月１日～2026 年 10 月 31 日）

（国）：国土地理院。グラフの空白部分は欠測。

①　父島Ａに対する北ノ鼻南の比高の変化（図７基線Ｆ）
②　父島Ａに対する硫黄島１の比高の変化（図７基線Ａ）
③　父島Ａに対する硫黄島２の比高の変化（図７基線Ｂ）
④　硫黄島１－硫黄島２の基線長変化（図７基線Ｃ）
⑤　Ｍ硫黄島Ａ－硫黄島２の基線長変化（図７基線Ｄ）
⑥　硫黄島１－Ｍ硫黄島Ａの基線長変化（図７基線Ｅ）
③青破線で示す変化は火山活動によるものではないと考えられます。

・2024 年頃から隆起速度に低下が認められるものの、長期的には島全体の隆起が継続しています（①～③）。
・長期的に④及び⑤の基線長に伸びがみられますが、主に硫黄島２（国）観測点で南方向の変位が継続していることによります。（Ｍ硫黄島Ａ（国）観測点は 2026 年４月１日から、硫黄島２（国）観測点は同年５月 17 日から、それぞれ欠測となっています。）



小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院、（防）：防災科学技術研究所

図７　硫黄島　観測点配置図

GNSS 基線（Ａ～Ｆ）は図４～６の基線に対応しています。